

「いかに」と「何が」問題と、「事実」か「フィクション」か問題
朴沙羅「物語から歴史へ——社会学的オーラルヒストリー研究の試み」（2011年、『ソシオロジ』）における対話的構築主義への批判の検討

オーラルヒストリー研究の2つの立場 (p.39-40)

- ・ 実証主義：語りを過去の事実の反映とみなす／語りの内容に注目して出来事の解明を目指す立場＝ヒストリー派
 - ・ (対話的) 構築主義：語りをインタビューの場での対話的な構築物とみなす／語りの生まれる状況やインタビューの現場に注目し、インタビューのエスノグラフィーを書くことを目指す立場＝ストーリー派
- ⇒ 桜井厚「対話的構築主義」、山田富秋「インタビューのエスノグラフィー」

批判を招いたその他の要因

⇒ この状況をいつそう後押ししたと考えられるのが、「私たちは回答者から得られた回答について、その背後にあると想定される客観的な社会構造や歴史的事実と照らして真偽をチェックしたりする必要はない」という山田富秋の主張である（山田編 2005: 3）。だが、これは行き過ぎた主張だと考える。（石川 2012: 10）

批判1：「対話的」と「構築主義」について

p.44 このような発想を生む土台として、インタビューの場と語られる内容とを別のものと見なす発想があるのではないだろうか。

批判2：「対話的」について

p.42 それは「ライフストーリー」の方法論ではなく、インタビューという行為の分析方法だ。当然ながら、この場合に調査の目的とされるのは「インタビュー」という行為であって、生活史の探求ではない。

⇒ インタビューそのものを対象とするのか、インタビューを手段として用いて得られる生活史を対象とするのかは異なっている。いかに語られたか (how) と何が語られたか (what) を分割し、howの分析だけを目的にするならば、whatはなんでもいい。とするならば、対話性 (how) を重視した調査ではwhatを対象にできない。

批判3：「構築主義」について

p.43 「対話的構築」における「構築」とは、過去の出来事の説明や意味づけがインタビューの場において「構築」されることを指しているものと理解できる。

p.43 しかし同時に、桜井は「あのとき-あそこ」の時間軸に属する〈物語世界〉と「いま-ここ」の時間軸に属する〈ストーリー領域〉とを分割することによって「過去のリアルさ」を一定程度留保しようとしている。

p.44 しかし、〈物語世界〉が持っている「一定の自立性」とは何なのか。「一定」とはどの程度で、その「自立性」とは語りの場に対してどのように担保されるのか。「対話的構築」に則った上での「過去のリアルさ」とは何なのか。

p.44-5 問題は「構築」という言葉の使われ方にある。「構築」という用語を厳密な基準なしに多用すると、「語られた内容は事実ではない」「事実など存在しない」「語られた内容が事実かどうかを問うのは無意味である」といった示唆を与えかねない。そのような含意を持ちうる言葉を使いながら、一方で「過去のリアルさ」や「構築されざるもの」をどこかに担保することは、矛盾とは言わないまでも混乱を招くのではないか。

⇒ 過去の出来事の説明や意味づけがインタビューの場において「構築」されるとしながらも、「過去のリアルさ」を一定程度留保している。ここでもまた、インタビュー過程 (how) と客観的な社会構造や歴史的事実 (what) とを別のものとみなしている。

⇒ 語りは構築されるものであり、事実ではない、フィクションであるという示唆を与えかねない。

p.45 対話的構築主義が、おそらくその本来の意図とは逆に、歴史相対主義を引き込みかねないことを指摘したい。

p.46 「多様性」を尊重するという名目のもとで、語られた出来事について事実であるかどうかを問わないという発想は、オーラルヒストリー研究を推進するための有効な方針ではない。

⇒ オーラルヒストリーは、事実の解明に寄与せず、相対化されてよいものではない。「多様性」を尊重するという名目のもとで、語られた出来事について事実であるかどうかを問わないという発想は、オーラルヒストリー研究として有効ではない。

いくつかの応答

⇒ 石川 (2012)、西倉 (2015a, b) など: howを重視するからといってwhatを対象にしないわけではない。むしろ、howを通してwhatを理解するのであり、Holstein and Gubrium (1995=2004) と矛盾しない。

p.48引用 重要なことは、この物語のどれが事実なのか、あるいはいずれもフィクションなのか、という点にあるのではない。なぜこの伝承が生まれ、人々に語り継がれてきたのかということである。語りの内容、すなわち〈物語世界〉にだけ注目していたのでは、歴史学的ストーリーが述べるように、古文書の記録によって語りの矛盾を指摘されてしまうと、伝承されてきた物語は根拠を失ってひとたまりもなく潰され消滅してしまうことだろう。(桜井 2005: 79)

↑の引用の続き しかし、人びとがこの伝承に込めている意味は、むらの成り立ちの歴史的事実についてというより、何を後世に伝えたいか、何を聞き手に伝えたいか、ということである。(桜井 2005: 79)

⇒ 物語世界 (what) だけを文書資料と照合させたら根拠を失うかもしれないが、ストーリー領域 (how) を通して理解すれば、語り手が何を伝えたいのかが明らかになる。

p.48 過去が語られるとき、過去の出来事と同時に現在の出来事も立ち現れる。ある出来事に関する「間違った」語りは、もしかすると別の種類の事実に基づいているのかもしれない。そのような複数の層にわたる事実を知り、人々がどのようにして「事実」をつくっているのかを知るためには、語られた出来事を複数の資料から検討することが欠かせない。

⇒ 朴 (2010)

p.48 ヒストリー派にとって、オーラル資料の特長は、語られたことの何が過去の出来事で、何が過去の出来事でないかを確認するところから生じる。事実なのかフィクションなのかを問わないということと、文献や他の資料によって「フィクション」があったと確定した上でさらにその「フィクション」という出来事の原因や機能を分析することとは、根本的に別のことだ。真偽を確定し過去の事実を確認することなしにオーラル資料の真価は計れず、オーラル資料は「フィクション」かどうかを問われることによって、より一層の価値を持つ。

コメント

朴論文は、対話的構築主義（桜井）とインタビューのエスノグラフィー（山田）を「ストーリー派」と一括りにしてしまった点に問題があった。対話的構築主義は、「いかに（how）」と「何が（what）」を分割して、「何が」だけを問うのではなく、「いかに」を通して「何が」を理解することを主眼に置いている。しかし、

p.50 上述のように「事実」を定義したところで、まだ問題が残る。つまり、だれがどのような手続きにおいて、個別の語りを「出来事と合致する」あるいは「合致しない」と判断できるのかという問題だ。（略）

朴は、（必ずしも目新しい手続きではないが）どうやって事実とフィクションを見極めるかを議論している。対して、（岸論文を読んだ後だからかもしれないが）確かに対話的構築主義は、何が事実で何がフィクションかを判断することには禁欲的に思える。その背景にはもちろん、文書資料偏重の従来の研究への批判・反省があるのだろう。

また、対話的構築主義は、「語りはすべて構築されたものだ」とか「語りはフィクションだ」などと言い切っていない。インタビューのエスノグラフィーのように事実を問う必要性を積極的に放棄しているわけでもない。しかし、かといって客観的な事実を解明することに主眼を置いてきたわけでもないため、事実かフィクションかを見極めるための手続きを（朴のように）積極的に論じていないのも確かだと思う。

「一定の自立性」や「過去のリアルさ」があると認めつつも、それをどうやって見極めるかを示してきただろうか。歴史実証主義的な「客観的な事実」のとらえ方を批判しながら、じゃあそれをどのように位置づけ、取り扱うのかについては、十分に議論されてこなかった、かもしれない。

参考文献

- Holstein, James A. and Jaber F. Gubrium, 1995, The Active Interview, Sage.
(=2004, 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティブ・インタビュー——相互行為としての社会調査』せりか書房.)
- 石川良子, 2012, 「ライフストーリー研究における調査者の経験の自己言及的記述の意義——インタビューの対話性に注目して」『年報社会学論集』25: 1-12.
- 西倉実季, 2015a, 「ライフストーリー研究における対話——それは誰と誰のあいだの対話なのか?」『N ナラティブとケア』6: 54-61.
- , 2015b, 「なぜ『語り方』を記述するのか——読者層とライフストーリー研究を
発表する意義に注目して」桜井厚・石川良子編『ライフストーリー研究に何ができる
か——対話的構築主義の批判的継承』新曜社, 49-74.
- 朴沙羅, 2010, 「〈事実〉をつくる——吹田事件と言説の政治」『ソシオロジ』54(3):
89-104.
- , 2011, 「物語から歴史へ——社会学的オーラルヒストリー研究の試み」『ソシ
オロジ』56(1): 39-54.
- 桜井厚, 2005, 『境界文化のライフストーリー』せりか書房.
- 山田富秋編, 2005, 『ライフストーリーの社会学』北樹出版.